「校歌」物語　白糠高校②　街を3日間歩き作詞

江口榛一さんは1914年（大正3年）、大分県に生まれた。明治大を卒業後、新聞記者などを経て、戦後、東京を拠点に本格的に詩作を始めた。小説も書き、49年に芥川賞予選候補、54年には芥川賞候補になった。校歌を作詞したのはこの間の52年だ。

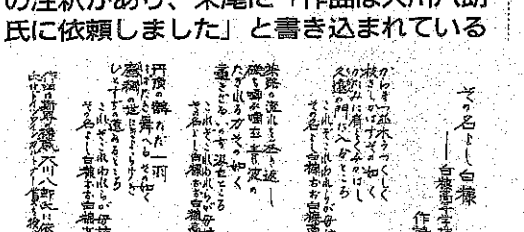
創作の最盛期に見えるが、生活はとても苦しかった。月刊文芸誌に毎号、作品が載り、芥川賞選考会で「名の通った詩人」と評された江口さんだが、家計は火の車だったようだ。詩作専業で得られる収入は少ない。その収入も文壇のつきあいなどで酒代に消えることも多かった。詩作にのめり込むあまり、家族に大きな苦労をかけてしまうことも多々あった。

長女の木綿子さんによると、51年8月ごろからは、木綿子さんら家族（妻と子供3人）を大分県の親元に預けて北海道を漂泊した。その年の暮れ、道内の知人のはからいで伊達高（伊達市、当時は伊達町）に職を得た。大分県から伊達へ家族を連れてきたが、生活は成り立たず、3カ月ほどで家族を千葉県の義姉のもとに預けた。木綿子さんは「私は小学1年生。1年間で大分県から伊達、千葉と転校しました」と振り返る。

江口さんは家族を千葉へ送り出した数カ月後、伊達高の職を辞した。白糠高を訪れたのは52年6月。千葉へ帰る途中だったかもしれない。その予定を変更して3日間、街を歩いた。「父はいつも一生懸命、真剣でした。校歌を作詞する時も必ずその土地へ行って作りました」と木綿子さん。

詩人は、北海道で暮らした1年間に多くの詩を書き、文芸誌「作家」などに発表した。伊達高の教員室で千葉にいる家族を思い、長男に自転車を買ってやりたいと悩む「自転車」という作品もある。

北海道で書いた作品で最も多くの人に愛されているのは白糠高の校歌かもしれない。70年間、1万1千人を超す卒業生が歌ったのだから。



江口榛一さん直筆の校歌の歌詞（白糠高提供）。「かたみに」「久遠の門」などの注釈があり、末尾に「作曲は大川八朗氏に依頼しました」と書き込まれている

「校歌」物語　白糠高校③　歌詞の風景 歩いて学ぶ

歌詞、難しくないですかー。白糠高の1年生に聞いた。「難しい単語が多いけど、作詞者と同じ風景を見て意味が分かった」と坂野琴美さん。佐々木啓さんも「白糠の自然を思い出しながら歌える校歌だと思う」と話した。

白糠高は2019年度から「総合的な探求の時間」で、1年生が校歌の風景を歩く授業を行っている。音楽の授業で歌詞を学んだ上で、その現場へ行き、作詞当時と現在との変化を探る「教科横断型」の授業だ。

70年前と同じ風景も、違っている景観もある。「校歌3番のタンチョウは1羽だけど、最近は高校の周囲に群れで来ますよ」と佐々木さんは笑った。

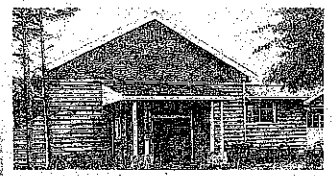
坂野さんは「（1番の歌い出しの）カラマツ並木も歩きました」と振り返る。カラマツは北海道の自生種ではなく全て植林。40年ほど前の航空写真では高校敷地を囲むように並木があったが、現在は敷地西側だけに残る。

実は、校歌が作られた1952年当時の校舎は、現校舎の場所（白糠町西4北2）ではない。

標茶農業高白糠分校は49年、白糠村（当時）内の青年会館を仮校舎に開校し、翌50年、国から払い下げを受けた旧軍馬補充部クラブを校舎とした。現校舎の200㍍ほど南、現在の根釧西部森林管理署白糠森林事務所（西4北1）辺りだ。現在地に校舎が立ったのは54年。82年に鉄筋コンクリート4階建ての現校舎に建て替えられた。

68年卒業の棚野孝夫・白糠町長が教えてくれた。「高校へ行く時に渡る函館線の踏切は以前、今よりも東の茶路川寄りにあって、生徒は営林署（現白糠森林事務所）敷地を斜めに横切って通学した。その通り道にカラマツ並木があった」。校歌が作られてから約15年後の話だ。江口榛一さんが見た並木かもしれない。

㊧総合的な探求の時間で、校歌に歌われているカラマツ並木を歩く白糠高生＝2019年、白糠高提供



㊨校歌が作られた当時の校舎